

地域は舞台 あいの会「松坂」(三重県松阪市)

文||御厨 貴 写真||鈴木 勝

歴史を今に

弾けよ!

ロマンとソロバンの街・松阪

あいの会「松坂」

1981年、文化遺産の掘り起こしと活用を通じて地域の発展を図ることを目的に市民有志が結成。松阪もめんの「藍」、出会いの「会」、郷土愛の「愛」が会の名称の由来。1989年サントリー地域文化賞受賞。

明治以降姿を消していた手織りもめんを復興し、商品化のために「松阪もめん手織りセンター」を設立。松阪もめんなる商品ではなくメディアとして活用し、松阪をPRした。ボランティアガイドの指導・育成、町並み保存のシンポジウム、本居宣長の人間像に光を当てる講習会や勉強会なども行ってきた。写真は、手織りセンターの理事で手織り作家、坂梨律子氏の作品。

松阪もめん手織りセンター 〒515-0081
三重県松阪市本町2176 TEL 0598-26-6355
<http://matsusakamomen.com/orihime.html>



歴史を 今に生かす

三重県松阪市(町村制施行以前は「松坂」と表記)。何と豊かな地域なのであろう。歴史が文化が、松阪という地



松坂城跡から見た御城番屋敷。城の警護を担当する武士の住居が、今も子孫たちの手で維持・管理されている。国の重要文化財。

域には今も生き生きと根づいていて。人も建物も道も、明治以来の近代化の中で変化をとげてはいるものの、街そのもののたたずまいは、今も歴史を感じさせるものばかりだ。いや近代以前そう江戸時代、いやもつと前の時代から松阪の歴史は語られる。ちよつとのぞいてみただけでも、松阪が育んできた文化の厚みに圧倒される。松坂商人、国学者本居宣長、松坂もめん、いずれも江戸時代に端を発し、松阪の歴史文化を今に伝えるものに他ならない。

松阪の不思議さは、歴史文化を単に地域の遺産として保存していかうとするだけではなく、それをむしろ今に生きる松阪の人々の日常生活の中に生かし、現代と歴史を往還するカタチをなそうとしていることにある。多くの地域文化は保存に手一杯で、それを今の人々の暮らしに生かすところまでには、到底及ばない。無論、松阪とて何もせ

ずに自然とそうなっていたわけではない。そこには、今や伝説となりつつある、松阪の歴史文化の発掘者であり、語り部であり、伝播者であり、後継者の育成にも尽くした「あいの会」松坂のリーダー、田畑美穂の存在があった。

地域文化の 担い手

私が今をさること二十年前、サントリー文化財団の「地域文化の担い手研究会」の座長を引き受けたとき、大分県湯布院町(現・由布市)、鳥取県日吉津村、福井県今立町(現・越前市)、滋賀県八日市市(現・東近江市)、富山県富山市からの参加者と共に、松阪からの参加もあった。いずれの地域も、カリスマ性を発揮した初代の担い手たちの時代が過ぎゆき、あつけらかんとい手たち―企業でいえば中間管理職に

あたる人たちの苦勞と大変ささに焦点をあて、彼等彼女等の体験を共有化することによって、地域文化なるものに何がしかの貢献ができたらとの目論見であった。

カリスマリーダーの すさまじい感化力

むくつけき男子ばかりの中、二人の女性の姿があったが、その一人が「あいの会」の事務局を務める坂梨律子さ



坂梨律子氏。自作の松坂もめんの着物は三重県展工芸部門に入選。

んであった。地域文化の担い手をいきなり一堂に会してお話をという、無茶ぶりの企画にもかかわらず、坂梨さんは首をふりふり懸命に松坂もめんのこと、「あいの会」のことなどをとつとつと語ってくれた。しばしば彼女の口をついて出る「田畑さんという方がおられて」との言葉が私の印象に残った。そして一九九八年二月、地域文化見学の第一号に松阪が選ばれた。

田畑美穂さんは、松阪の歴史文化の「カリスマ的担い手」という印象を、現地で受けた。強烈な個性の持ち主であり、その感化力にもすさまじさがあった。好奇心のなせる業で、関心が広く知識をすぐに自家菜籠の中のものにする。何がすごいと言って、田畑さんの



松坂商人、長谷川治郎兵衛旧宅。平成25年に松阪市に寄贈され、日曜、祝日に一般公開されている。

る。会が終わると音読を果たした皆が晴れ晴れとした顔をしている。館長はじめ誰もが「宣長さん」と、すぐそばにいる人のように気楽に話題の中心にする。吉田さんは、やはり田畑さんの「歴史を今に生かす」精神で、本居宣長を松阪の「宣長さん」として親しみ、

また宣長の提起した問題が今の日本にも通ずると信じ、「今こそ本居宣長」と語りかけるのだ。かくて、「宣長降臨」は、松阪の歴史文化に息づいている。田畑さんは赤い血の通う「生活文化」が一番好きだったと語っている。それは五感を全開にして松阪の歴史文化を



着物姿で松坂城跡を案内する女性。ロマンとシスターをかけた「ロマネスター」は田畑氏の造語。

企画力そして広報力だとその時思った。歴史を歴史に止めおくのではなく、どうやったら今に生かせるかという発想からスタートするのだ。しかもそれを広く松阪の観光に生かそうとする。松阪もめんの着物姿の女性たちによる「ロマネスター」というボランティアガイドの存在にも惹きつけられた。観光と松阪もめんのPRに女性を生かす試みなのだ。坂梨さんその人は、ずっと松阪もめんの手織り職人であり、今は作家として活躍している。

「宣長さん」と松坂商人

今回二十年ぶりに訪れた松阪に、田畑さんの姿はもうなかったが、直接間接に田畑さんの「歴史を今に生かす」精神を実践している人たちに出会った。そこで江戸時代の国文学者、本居宣長を今に生かす試みに参加した。本居宣長記念館館長の吉田悦之さん主宰による『古事記伝』音読会が、毎月一回、二十余年この方開かれている。これも一九九〇年代初頭から、田畑さんらの参加を得て始められたものだ。別に専門の研究者によるこむずかしい研究会ではない。それこそ市井の老若男女が三々五々集まって、九年前からは『古事記伝』を皆で音読している。吉田さんはそのガイド役に徹する。しかし声に出して読んでいるうちに、本居宣長の気分がすーっと体の中に降りてく



本居宣長記念館館長の吉田悦之氏(右)。吉田館長が用意したテキストを一生懸命音読する男性(左)。

今に生かすことに他ならない。やはり二十年ぶりに街歩きをしながら、松坂商人の館が今に生きている姿が目についた。江戸時代に始まり明治になつて発展を遂げた長谷川治郎兵衛家旧宅がそれだ。業態変革を時代に合わせ行いながら、松坂商人の館を維持拡大した歴史をたどる時、地味かつ堅実さの中に生き続けた松坂商人の存在が、館の安定性と共にキラリと光るように見える。

創業者世代と新世代

御城番屋敷まで歩くと、江戸時代からの屋敷の姿を今に残しているだけではなく、今そこに住んでいる人たちがいることに驚く。屋敷の一角に住む高岡良治さんのお宅に、田畑さんと共に松阪の歴史文化を担った人々に集まってもらった。まさに創業者世代であ

り、「あいの会」「松坂」「伊勢の国・松坂十楽」「松坂もめん協議会」「松坂木綿振興会」などに集う人々の代表たちだ。正直のところ、一仕事終えて今は一段落という感が否めない。創業者世代には松坂の歴史文化を生きたことにそれなりの「こだわり」や「ウソチク」が新しく生まれつつあるのかもしれない。

ただ田畑さんを直接には知らぬ世代から企画力・広報力を新しく発揮している姿も見られる。

これまでのあり方を知らぬからこそ出来るというべきか、高岡良治さんの「まさかのまつさか」、東村佳子さんの「松坂もめんフェスティバル実行委員会」などの企画には松坂ならではの個性と全国的な観光マニユアルとを化学合成してみせる感が強い。創業者世代と新世代、どうやら坂梨さんは



田畑美穂氏とともに30年以上走り続けてきた第一世代。

二代目世代として、この両世代の橋渡しをする役目を期待されているのかもしれないと、フト思った。もしもそれら口にしたなら「そんなことありません」と半オクターブ高い声で、身ぶり手ぶりをまじえて否定されてしまうのが、オチなのだが。

松坂もめんの復興

坂梨さんの手織り職人としての道を拓いたのが、他ならぬ田畑さんだ。田畑さんはインタヴューの中で、ほとんど絶えていた手織り松坂もめんの復興を進めた点につき、次のように語っている。「藍染めをベースにしたストライプ柄、これは日本人の黄色い肌の色によく合い、また縞柄はバリエーションが豊富ですから、伝統の中にもオリジナリティを生かせる。頭と手と足を使って織る技、江戸つ子にうけた松坂縞の粹さ、藍というエコロジカルな染料、すべて現代にも生かせると思えましたね」

かくて田畑さんは一九八一年、自らが館長となった松阪市立歴史民俗資料館の中に「ゆうづる工房」を設け、翌年から手織り伝承グループとして「ゆうづる会」が立ち上がった。同時期に結成

された「あいの会」「松坂」その事業部門たる「松坂木綿振興会」とが車の両輪の如き役割を果たし、松坂の手織りもめんは急速に復興され、松坂の今の観光産業の中に組み込まれていった。

産業化、観光名産品化のドライブの中にあつて、たえず松坂もめんの歴史的由来を探りデータを作り、古老の聞き取りを行うなど、幅広くつながる歴史の糧を得て、手織り職人の育成が進んだことがすばらしい。しかもこれぞ女性の力によるものだ。

女性による変革と創造と

松坂もめん手織りセンターで働く女性スタッフの話は、いづれも真面目でしかし力にあふれるものだった。三十余年前に復興した手織り松坂もめんを



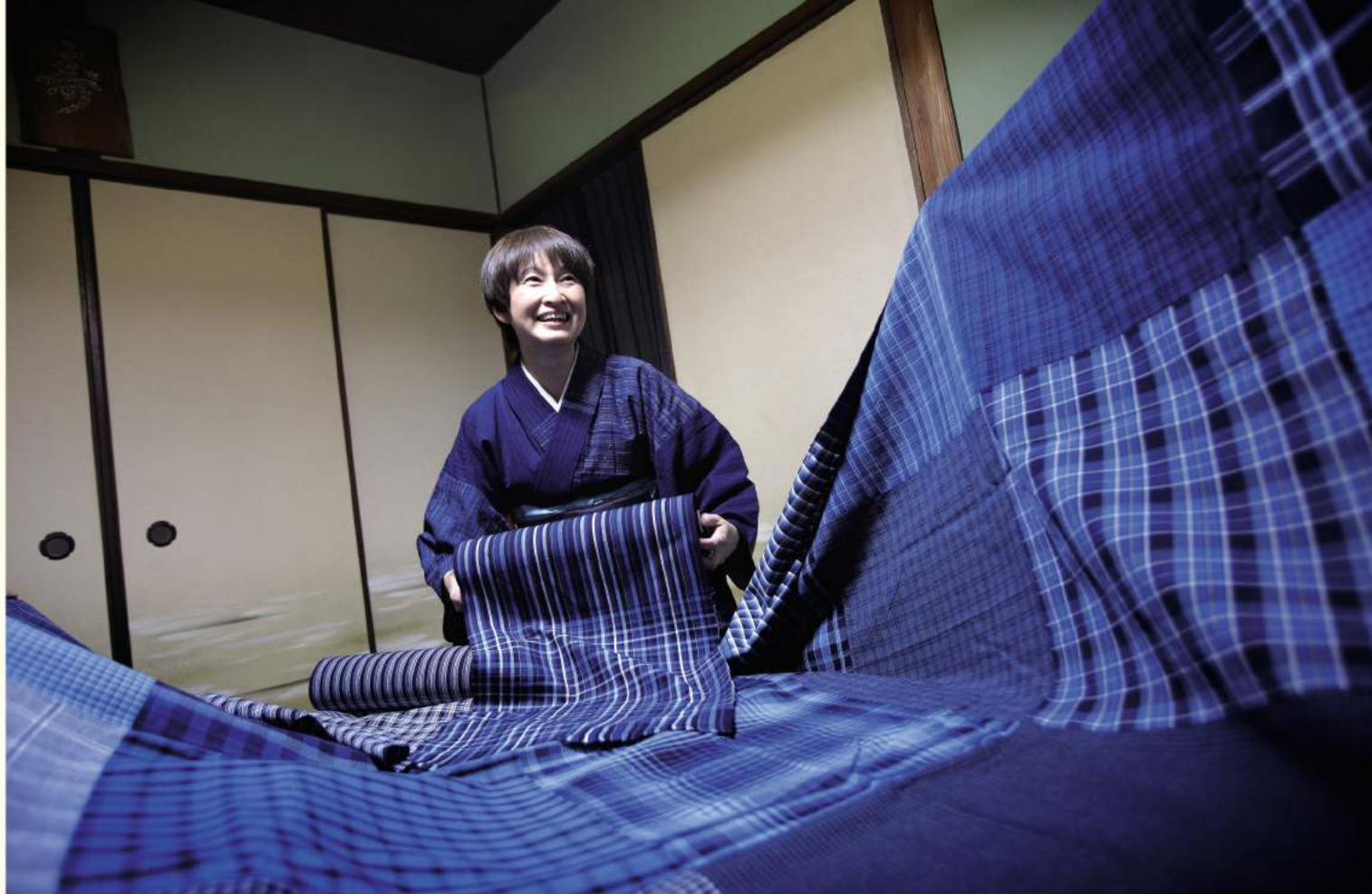
松坂もめん手織りセンターで機を織るゆうづる会会員(上)。江戸時代の書物の言葉が、センターの正面に飾られている(下)。

近隣の学校に伝えたり、大きな作品づくりに挑戦したり、様々な形のファッションショーを展開したり、今や一地域たる松坂を越えて全国的な評価を得るまでに至っている。

センターの田中茂子さんは、女性の力が特に中高年のそれこそおばさんパワーがフル稼働することによって、松坂もめんが男性社会を静かに、しか

し着実に変えていく様を語った。こうした歴史の中から蘇ったもめんというモノの力によって、今という社会を変革していく。松坂の歴史文化の奥の深さ、射程距離の長さに、うならされることしきりだった。

そして今、実家の納屋に機をおいた簡素な私工房のかたわらに坂梨さんは立つ。藍染め、ストライプ模様という



見本用に織った格子柄をつないだ大きなタペストリー。個展に出展するために製作した。



残り糸をつないだ糸球。この日坂梨さんが着ていた着物の横糸に使われた(上)。坂梨さんが藍を育て、染めた木綿糸(下)。

カタチを生かす松阪伝統の手織りもめんの世界から、坂梨さんは一歩を踏み出した。もともと自由人たる気質をもつ坂梨さんは、松阪もめんを自由自在に自らの想像力を生かして創造する道を選んだのだ。実家でいくつもの自由への挑戦を重ねる坂梨さんの美しい手織り作品を鑑賞した。松阪に根づきながら松阪から自由になる。それは決して楽な道ではない。しかし松阪の歴史文化をふり返って見れば、「宣長さん」だって多くの松坂商人だって、そうやって松阪であって松阪でない個性を育んできたのだ。だからそれは断じて、茨の道でもない。

はるばる来つるものかな。歴史文化に育まれ、それを今に生かす松阪のダイナミクスに触れて、地域文化の掘りおこし、まだまだ捨てたものではないぞと、確信に満ちた思いに包まれるのだった。



長谷川家旧宅の正面(右)。記念館の入り口に飾られている本居宣長像(左)。